【現地報告】

カナダ・オンタリオ州とケベック州における先住民文化体験の報告
Mādahòkì Farm「Tagwàgi (Autumn) Festival」及び マッコードスチュアート博物館常設展「INDIGENOUS VOICES OF TODAY　Knowledge, Trauma, Resilience」

榎 本　歩 美

筆者は 2023 年 10 月にカナダのオンタリオ州とケベック州に滞在し、カナダ東部先住民文化に関するフィールド調査を実施した。本稿は、調査期間に訪れたオタワ近郊の Mādahòkì Farm で開催された Tagwàgi (Autumn) Festival と、モントリオールのマッコードスチュアート博物館の常設展について、カナダ先住民文化に関する取り組みと自身の体験の共有を目的として報告する。

1. Mādahòkì Farm「Tagwàgi (Autumn) Festival」

開催日：2023 年 10 月 14 日（土）・15 日（日）
開催場所：オンタリオ州ネピアン　Mādahòkì Farm
主催：Mādahòkì Farm（Indigenous experiences）
後援：GOVERNMENT OF CANADA・GOVERNMENT OF ONTARIO・OTTAWA TOURISM・CITY OF OTTAWA・NATIONAL CAPITAL COMMISSION・TD BANK GROUP・95.7elmnt fm・Ontario Arts Council・Canadian museum of nature・ALGONQUIN COLLEGE

【プログラム内容】
・セレブレーションステージ
　TRADITIONAL OPENING & LAND ACKNOWLEDGEMENT　（10:30AM）
　HREE SISTERS STORYTELLING SHOW&POW WOW DANCE（11:00AM・1:00PM・3:00PM）
　HARVEST STORYS&SONGS with DAVID FINKLE（12:00PM・2:00PM・4:00PM）
・ワークショップ（ウッドランドアート・コーン人形・ハンドドラム製作（14 日のみ））
・食体験（タコス・バノック・ジュース他）
・動物とのふれあい
・レガシートレイル（伝統的な植物と薬の知識を学べる小道の散策）
・和解の石（寄宿舎学校の犠牲者の哀悼のための石にメッセージを書く）

会場の Mādahòkì Farm は、オンタリオ州及びケベック州周辺のアルゴンキン文化の体験施設であり、カナダで唯一先住民によって運営されているアグリツーリズム観光地として知られる。農場スタッフのほとんどが周辺地域出身の先住民で、「先住民の視点から土地、物語、食べ物を共有する」というビジョンの下、季節に応じた様々な体験プログラムが実施されている。特に、オジブワスピリットホース（**写真 1**）と呼ばれる北米原産の絶滅危惧種の馬の保護に力を入れており、馬を教師としてライフスキルを身に付け、先住民の教えを学ぶことを目的としたユニークなプログラムが提供されている。農場には馬舎や小動物の小屋、ステージ、ワークショップや食体験のための施設、休憩用のティピ（テント）と販売店のほか、伝統的な植物が育てられている小

道を歩きながら植物や薬の知識を学ぶことができるレガシートレイルがある。また、先住民同化政策下の寄宿舎学校で犠牲となった子供たちを追悼し、関心と理解を深めるために、和解の石と呼ばれる手のひらサイズのオレンジ色の石にメッセージを書いて、レガシートレイルに残していくという取り組みが行われている。

今回、筆者が参加した Tagwàgi Festival は秋に開催されるイベントで、パウワウ（**写真 2**）やドラムなどのステージパフォーマンス、ワークショップや伝統的な食事を体験することができる。

写真 1　オジブワスピリットホース
（Mādahòkì Farm にて筆者撮影）

ステージパフォーマンスは、両日とも 10 時 30 分のオープニングセレモニーに始まり、それぞれの演目が 1 日 3 回公演された。オープニングではフェスティバルの内容や注意事項、農場の活動とオジブワスピリットホースの歴史、寄宿舎学校での体験と回復力についての話があり、次にパウワウのステージであった。パウワウは子供のダンス、母親と子供のダンス、女性、男性のダンスと続き、クライマックスのフープダンスで盛り上がりを見せた後、最後は観客もステージ前でダンスするといった流れで、それぞれの演目前に衣装とダンスについての説明があった。パウワウが終わると、先住民ハウデノソーニ―の「三姉妹の物語」が上演された。三姉妹とは伝統的な作物であるトウモロコシ、豆、カボチャのことで、それぞれの作物をイメージした緑とオレンジのカラフルな衣装を着たパフォーマー（**写真 3**）が、音楽と語りに合わせた動きで物語を表現していた。

写真 2　パウワウ

写真 3　三姉妹の物語のパフォーマーたち

最後のステージは、モヒカンのドラムパフォーマーである DAVID さんによるドラム演奏と作物に関する歌のパフォーマンスで、一つ一つの歌についての詳しい説明があった後、DAVID さんのドラムに合わせて観客も一緒に歌うという楽しいステージであった。筆者は公演後、DAVID さんにドラムを間近で見せていただき、少し演奏させてもらうことができた。DAVID さんお手製のエルクの皮で作られたドラムを叩くと、ドンドンドンという深い音と一定のリズムが身体中に響き、ドラムを持つ手から感じる皮の感触がとても心地良かった。

またワークショップでは、ウッドランドアート、トウモロコシの皮で作るコーン人形、ドラム作り（14 日のみ）の体験プログラムがあった。各体験ではスタッフによるそれぞれの歴史や文

化の解説と作り方のレクチャーがあり、特に子供たちの参加率が高く家族やスタッフと会話を楽しみながら学んでいる様子が窺えた。筆者はウッドランドアートのワークショップに参加し、スタッフに絵のモチーフについて教わった。ウッドランドアートとは、オジブワやオダワ、ポワタトミといった五大湖地域の先住民の芸術家が用いるアートスタイルで、ワークショップでは誰でも簡単にウッドランドスタイルで描けるように、オオカミや亀、星や草花など様々な種類のステンシルと絵具が用意されていた。実際に絵を描くことで、ウッドランドアートにより親しみを感じることができ、先住民の動植物に対する思いをゆっくりと時間をかけて理解する良い体験となった。コーン人形やアートは農場のいたるところに飾られているが、特にオジブワスピリチュアルホースを題材とした、アーティストの Rhonda Snow 氏の作品（**写真 4**）が馬の囲いに沢山立てかけられており、農場を訪れる人々はアートと動物たちに同時に触れることで先住民と動物のつながりを感じているようだった。

ワークショップが行われた施設では食事も提供されており、ストロベリージュースやインディアンタコスといった地域の先住民に親しまれてきたメニューが並んでいた。また、施設の外ではバノックという先住民のパンを自分で焼いて食べることができ（**写真 5**）、すばらしい味覚体験に多くの人が賑わっていた。

写真 4　Rhonda Snow 氏のアート作品と馬

写真 5　バノックを焼く窯

農場での体験は、五大湖地域のアルゴンキンの先住民文化を、五感を通じて楽しく学ぶことができるユニークなものであった。パウワウや歌に参加し、絵を描いて動物や植物と触れ合うことで、先住民文化に対する学びと理解をより深めることができたように感じる。筆者が訪れた 10 月 15 日は小雨が降っており寒い日だったが、農場の暖かい空気に包まれて、訪れた人々はみんな和やかに先住民の文化について話し合っている様子が大変印象的だった。

2. マッコードスチュアート博物館　常設展

「INDIGENOUS VOICES OF TODAY　Knowledge, Trauma, Resilience」

展示期間：2021 年 9 月 25 日～現在（10 月 11 日（水）訪問）

展示施設：McCORD STEWART MUSEUM

主催：CBC/RADIO-CANADA

共催：TD BANK GROUP

後援：UBISOFT・Panasonic・LA PRESSE・MONTREAL GAZETTE・La Boite RougeVIF・CONSEIL DES ARTS DE MONTREAL・Gouvernement du Québec

本常設展は、博物館の 100 周年記念事業の一環として、ヒューロンウェンダットの Elisabeth Kaine キュレーターによって監修され、先住民の知識・トラウマ・回復力に焦点が当てられた内容となっている。ケベック州とカナダの先住民の約 100 点のオブジェクトと人々の声を記録したビデオによって、先住民と非先住民の対話を促し、先住民文化の理解を深めることを目指して先住民の視点から作られた展示である。

【展示構成と内容】

展示は三つのテーマに分かれており、カナダ先住民の知識、トラウマ、回復力について補完的に学ぶことができる構成となっている。

展示室に入ってすぐに、和解の道を開くことを求める人々の姿が大きな円形のビデオに映し出される。このビデオの後、一つ目のテーマである「Us a Long Time Ago」の展示（**写真 6**）が始まる。ここでは、生活に関する多様な知識が取り上げられており、先住民の精神性と、環境に適応しながら生業を営み家族を養うための知恵と技術力を知ることができる。狩猟採集生活に重要な「Moving」の技術では、イヌイットの犬ぞりのミニチュアやカヌーの模型、スノーシュー、持ち運び用のナイフや調理器具が展示されている。次の「Celebrating」のコーナーでは、パウワウに使用する冠やドラム、「Interacting with Animals」「Obtaining Food」では狩猟用の罠やポーチ、動物の皮の衣服といったオブジェクトが、テーマに関連する知識や経験を語る人々のビデオとキャプションによって分かりやすく説明されており、目の前にある展示物がどのように人々の生活の一部となっているのかを具体的にイメージすることができた。また、子供を育てることに焦点が当てられた「Children Are the Centre」の「Loving」では、ベビーキャリーや人形、木製のカリブーのおもちゃ、そして子育てをする女性や少女たちの数々の写真が並んでおり、先住民のコミュニティにおいて子供たちが中心的な位置にあることを実感した。その次のコーナーでは、職人の技に着目し、カラフルなビーズ刺繍が施されたモカシンやポーチ、動物の皮で作られた防水の衣服、木製箱などが、「Innovating」「Becoming Expert」というタイトルで展示されていた。

写真 6　「Us a Long Time Ago」展示の様子
（マッコードスチュアート博物館提供）

写真 7　「Our Shattered Universe」展示の様子
（マッコードスチュアート博物館提供）

白い壁とグリーンの文字が用いられ、明るい印象だった一つ目のテーマの展示室とは対称的に、二つ目のテーマである「Our Shattered Universe」（**写真 7**）は、黒い壁に赤い文字といった展示室内で、植民地化によってもたらされた先住民のトラウマの経験が多数の展示物とともに語られていた。特に先住民の言語の喪失、今なお続く不平

等と差別、貧困といった深刻な問題に対して、怒りと悲しみを持って語られる数多くのビデオをオブジェクトと合わせて見ることで、深い反省と理解を求める声が展示全体から伝わってきた。

最後のテーマである「Take Our Rightful Place」はコミュニティの回復力に焦点を当てており、癒しのプロセスと和解のための対話の重要性が強調されていた。展示は現代アーティストのLudovic Boney 氏による作品『トレード・オーナメント』から始まる。木やリボン、金属など異素材を組み合わせた作品は、ヒューロンウェンダットの酋長の装飾品と似た形状をしており、現代アートと伝統的文化の象徴との繋がりを感じることができる。展示を進むと、入り口と同じ大きなビデオが登場する。そこでは、ケベック州の先住民の人々によって、知識や考えを非先住民と共有すること、暴力ではなく平和を求め、お互いのより良い将来のために共感と対話が必要であることが語られていた。そして全ての展示の最後に、先住民の回復力を示す取り組みが 14 のビデオによって詳しく紹介されており、自らができることやこれから何をすべきかを訪問者に問う形で展示は終了した。

「INDIGENOUS VOICES OF TODAY」という常設展のタイトルの通り、オブジェクトとともに豊富な映像とキャプションによって先住民のリアルな声を聞くことができた。人々が現在どのような思いを抱え、自然との関わり合いの中で生活の知識と生きる力を身に付け維持してきたのかを丁寧に感じ取りながら学び、考えることができる素晴らしい展示であった。壁と文字の色が大きく変化する点も印象的で、訪問者に深い共感を与える工夫がなされていると感じた。展示を見ている間、知識や経験をシェアする形で未来に向けた行動を促すことを大勢の先住民の人々から力強く語りかけられているように感じたのは、筆者だけではないだろう。

以上、本報告で紹介した Mādahòkì Farm のフェスティバルとマッコードスチュアート博物館の常設展への訪問を通して、カナダにおける先住民文化理解の取り組みの幅広さに驚くとともに、自らの身体全体で先住民の文化を学ぶ経験の重要性を改めて感じることができた。

謝辞

本調査は北海道大学大学院文学院「共生の人文学」プロジェクトの助成を受けて実施しました。

（**写真 1～5** は Mādahòkì Farm にて筆者撮影・掲載は Mādahòkì Farm スタッフにより許可）

（**写真 6・7** はマッコードスチュアート博物館により提供・掲載許可）

（えのもと・あゆみ／北海道大学大学院　博士後期課程）